



朝、今のJR須磨駅を出発し夕方本竜野駅につきました。駅前には町長や国民学校長、愛国婦人会のおばさんが待っていました。

「兵隊さんはお国のために戦っています。皆さん少国民も頑張ってください。皆さんは次の時代の国の宝です」

「同じ言葉これで五回目やで」

裕子が凭れかかります。

「しっ、立派な少国民は我慢せんとあかんねん」

律子が裕子の手の中に飴を入れると、裕子は黙りました。

須磨駅を出発する時、お母さんから腹痛の薬《わかもと》の瓶に飴を入れたのを貰ったのです。絶対秘密の飴です。



「お一つおさら、おふたつおさら……」
部屋で三人がお手玉をしています。

救急袋から何かを出して口に入れている子がいます。しくしく泣いている子がいます。

律子もさつきから、おなかがかクークーなっています。でも強い少国民は我慢しなければいけません。

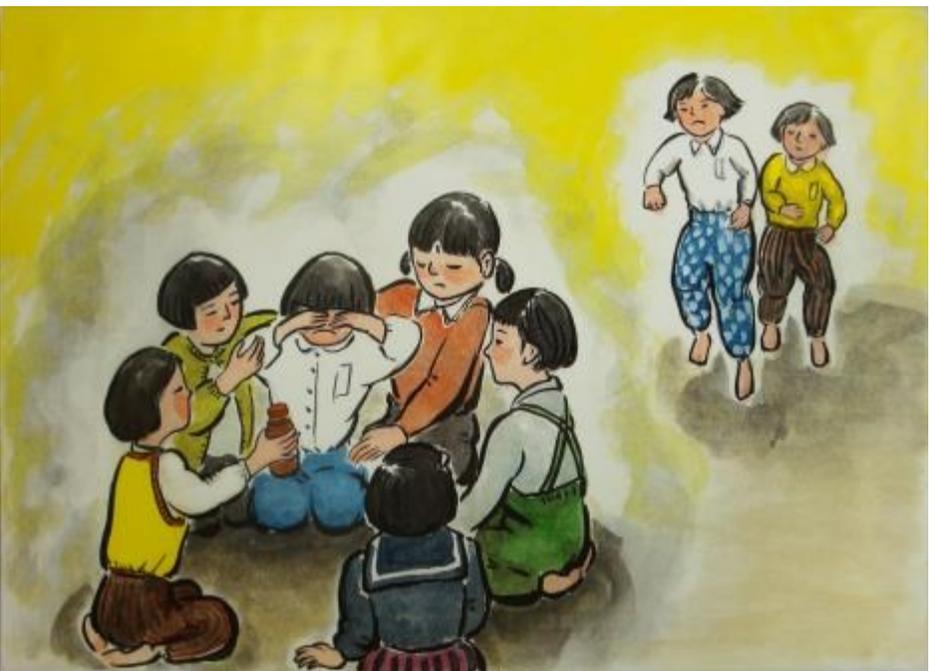
律子はそつと《わかもと》の瓶の蓋を開けました。甘い匂いがしました。

裕子も《わかもと》が届いたと言っていました。

今夜は裕子の《わかもと》を貰う日です。



夜、裕子が隣の布団で《わかもと》の蓋を開けました。二人は
「せーの」
と、いっしょに口に入れました。苦い。
二人は吐き出しました。
「お母ちゃんは、あほや《わかもと》を送つてと書いたたら、これは本物や」
律子は自分の《わかもと》を裕子の口に入れてやりました。
「やっぱり甘いわ、おおきに」
裕子が大きな声を出すから、部屋中の子が頭を上げました。
「裕子はほんまにあほや」
律子はぶつぶつ言つて、布団の上の口に律子の《わかもと》を一粒ずつ入れていきました。



「わーん、わーん」
部屋の真ん中で大声で泣いている子がいます。四年生の妹がいる子です。
「この子の妹がギンナンを食べて、エキリになって入院したんやて」
周りの子が教えてくれました。
「これ、おなか痛の薬やねん」
裕子が本物の《わかもと》を渡しています。
その子は泣きながら手を出しています
が、泣き声は止まりませんでした。



肥をくみ取る作業の日です。

先生が大きな柄杓で便槽をかき交せて、桶に半分くらい入れます。それを二人で担いで町中を通り女学校の畑まで運びます。

重くてよろよろします。汗も拭けませんが、臭くて口も開けられません。

前の組もふらついていきます。そのたびにびちゃ、びちゃと音がして肥を道にこぼしています。

畑では、もう一人の先生が柄杓で畑にまいていました。

帰りは揖保川へ行つて、川が桶を洗ってくれるのを待っていました。



夜、律子たちは火鉢の周りに集まりました。

町で拾った空き缶でお手玉の豆を炒るのです。

(ころころ、がらがら)

部屋中に音と匂いが広がります。暗いかなかな光の中を、煙が渦を巻いて登っていきます。

皆が布団から顔を上げて律子たちを見ています。起き上がって近づく子がいます。

律子のお手玉の豆は大豆です。皆に分けると二粒しか当たらなかったけど、おいしかった。

裕子のお手玉も開けました。豆はアズキでした。これは固くて食べられませんでした。



全員頭も体もシラミだらけになりました。
体のシラミは白く透き通っています。体中に黒く見えるのが人間の血です。律子たちは、シャツについているシラミと卵を爪でつぶします。

(ぶちっ、ぶちっ)
と音がします。

頭のシラミは、頭に酔つけて、梳き櫛で梳いてもらいます。

あたりに酸っぱいにおいが広がるのも慣れてきました。

「シラミいうたら、昆虫みたいやで。羽はないけど足が六本あるで」

律子はおどけて言ったのに、

「あほや」

と裕子はそっぽを向きます。律子は何故か悲しかった。



雨の日です。男の人が三人来ます。前の人は背中を伸ばして歩いています。後ろの二人は大きな荷物を重そうに抱えた人と、前の人に傘をさしかけています。どちらも背中も足もびしょ濡れです。

前の人は、班長の啓子のお父さんです。

「皆さんに、お米を届けに来て下さったのですよ」

終礼のとき、先生が言いました。後ろの人は部下でした。

「やっぱり、偉い人はええなあ」

お米は嬉しいけれど、律子は寂しかった。

律子のお父さんは、中国で戦っているのに、偉い人は戦争に行かなくてええのか、と不思議でした。



ひと月ほど経ったでしょうか、班長の啓子が荷物の前で泣いています。ご飯も残しています。啓子に面会がありません。

「面会がないくらいで泣くのは非国民や」

律子は啓子の背中に言いました。

「そんなん違うわ、違うわ」

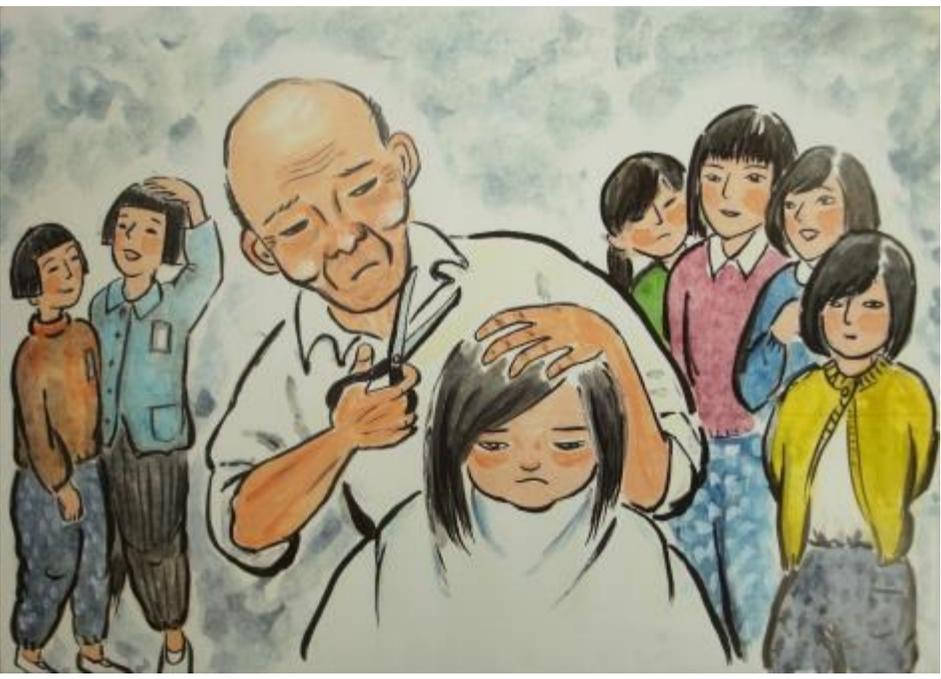
啓子は頭を振って泣き叫びます。

先生が走ってきました。

「お互いに助け合わなければいけません」

先生が何も説明してくれなかったのが、律子は不満でした。

泣き声は大きく長く続きました。



数日後です。

神戸から疎開をしてきている散髪屋のおじいさんに律子たちは散髪をしてもらいます。

そのおじいさんの家は啓子の近くです。

啓子が散髪してもらっています。

「嬢ちゃん、心配せんでええ。嬢ちゃんのお父さんはええ人や。戦争が悪いんや」

啓子の泣き声は大きくなりました。

「戦争がいつ終わるか分らんから、子どもまで苛立ってくるわな。嬢ちゃんは心配せんでええ」

啓子は泣くばかりでした。

律子は何も分りませんでした。



班で龍野の町を廻っているときでした。
啓子は一人離れて後ろを歩いていきます。
六年男子が泊っている寺の前まで来ました。
寺の扉が開いていて、男子生徒が散髪を
してもらっているのが見えます。
本堂の縁側に座っていた男子生徒たちが
走って出てきました。啓子に言いまし
た。
「やーい、やーい。スパイの子」
「こらー、何も知らんと変なこと言うた
ら、散髪してやらんぞ」
がーん
扉の閉まる大きな音がしました。寺の中
は静かになりました。
啓子は口を噤んだまま俯いています。啓
子はもう泣きませんが、神戸に帰るまで誰
とも目を会わせませんでした。



律子たち六年生は卒業式のために、三月
十日に神戸に帰ります。
今日は朝日湯に行く最後の日です。
律子たちが風呂から上がると、番台のお
ばさんが飴湯を持ってきました。
「わあ、おいしい。甘いわ」
律子たちは長い時間をかけて飲みまし
た。おばさんには夏は梅のジュースをもら
いました。
律子はモンペのポケットから「わかも
と」の瓶を出しました。皆が手を出しまし
た。
「これは、おばちゃんにあげるねん」
でも皆の手に二個ずつのせました。まだ
瓶の底に少し残っています。律子はおばち
やんに出しました。
「まあ、思いがけない。ありがとう」
と何度も何度も言いました。
律子たちが神戸に帰ると、空襲があり、
町は焼け野原になり、焼夷弾に当たって死
んだ友だちがいます。